

みらい賞

宮城県／76歳／男性／無職

おいかわ まもる

及川 守様

✉手紙の相手：亡き兄

兄さんが肺炎で急逝してから、もう十一年もたつというのに、通夜の日のことは、今でもはつきりと覚えています。

弔問客も少なくなった午後八時過ぎ、見慣れない若者三人が焼香に訪れました。

「すみません、どちら様でしょうか？」

と尋ねると「明先生に二年生の時に教えてもらった教え子です」とのこと。

兄さんは若いころ、海の近くの小さな小学校に勤めていたよね。その時の教え子だということです。

その学校のあった地域は、東日本大震災で壊滅的な被害を受け、復興も思うように進んでいない大変な状況なのに、新聞で訃報広告を見て、駆けつけてくれたらしいのです。

これを聞いて、通夜に来ていた親戚や近所の人は、みな驚きそして感動しました。

この変化の激しい時代、小学校二年生の担任を覚えている人など

何人いるでしょうか。

しかも東日本大震災で、自分の家が流されたりして困っている時に、わざわざ二時間以上かけて弔問に来てくれるなんて……。

兄さんと最後の別れの焼香をする若者たちの姿を見て、この時ほど「先生っていい仕事だなあ」と思ったことはありません。

兄さんが若者たちにどのような教育をしたのかは分かりませんが、でも彼らはみな「学校に行くのが、待ち遠しかった」「明先生と過ごす毎日がとっても楽しかった」と目を輝かせて話していました。

「いい教師は、人の心に灯をともし」といわれます。子供の目線で物事を考え、一人一人の子供を大切にしてきた兄さんのことだから、

きつといい教育をしたのだろうな、と誇らしく思いました。

私も喜寿を迎え、もう少しでそちらに行くようになると思うけど、それまで兄さんのような「人の心に灯をともし」人間に近づける

よう一日一日を大切に生きていくので、天国から見守ってほしいな。

≫ 手紙への想い ≪

11年たった今でも明るくユーモアにあふれた兄のことを、時々思い出します。「教育は人なり」ということを機会をとらえては、懇切丁寧に教えてくれた兄を想って書きました。